

『火 夫』

——実現されなかった計画『息子たち』から見て——

吉 野 英 俊

カフカの最初の長編小説『アメリカ』（„Amerika“）は主として1912年の10月から11月にかけて快調に（初めの六章は6週間以内に書かれている）書き進められたが、その後はゆっくりと書きつがれていった。⁽¹⁾その第一章を成す『火夫』（„Der Heizer“）は、独立した短篇の形で1913年5月にクルト・ヴォルフ社「最後の審判の日」叢書の第三巻として発表され、それによってカフカは周知のように、カール・シュテルンハイムによって賞を譲られたという経緯はあるが、1915年6月にフォンターネ賞を受けている。

女中に誘惑され、その拳句に子供までもうけてしまった若き主人公カール・ロスマンはスキャンダルを恐れる父親によってアメリカへ追放される。その船上で、上陸寸前に火夫と出会い、彼の被った虐待をめぐる船の法廷の最中に、幸運にもこの地で大成功を収めた伯父に見出される。といった風に少しも劇的な筋を持たないこの物語を、筋の経過という観点から見てみると、事件の展開は主人公をその導きの糸としながらも、彼の意志をいささかも反映することなく、偶然といってよいほどの外部状況に支配されていることがわかる。⁽²⁾物語はカールの乗る船が折しもニューヨーク港に到着する場面から始まるのだが、彼は奇妙な自由の女神像に見とれて、いざ下船という時になって突然雨傘を下の船室に置き忘れたことに気づいて驚く。《Aber wie er über seinen Bekannten

hinsah, ……., merkte er bestürzt, daß er seinen eigenen Regenschirm unten im Schiff vergessen hatte. (A. 9)》ここからカールは未知の力に弄ばれ始める。他の乗客たちが上陸するために上甲板へ上がっていくのとは逆に、ただ一人カールは船底へ降りてゆくのだが、近道の通路が遮断されていたために道に迷ってしまう。時期が悪かったのだ。というのも、この遮断は乗客全部の上陸と関係があるらしいからだ。途方に暮れたカールはたまたま目の前にあった小さなドア（これこそ実は火夫の部屋のドアなのだが）をよく考えてみもせず叩き始める。ここでも偶然が支配していることは以下の文中の《beliebig》という語によって知られよう。《……, fing er ohne zu überlegen, an eine beliebige kleine Tür zu schlagen an, …… (A. 10)》そして雨傘を探している途中にもかかわらず、カールは火夫の部屋でかなりの時を過ごすことになるのだが、彼がこの部屋に居坐る契機を作り出すのは、「のぞき見されることが我慢できない (A. 10)」という火夫のちょっとした習癖なのだ。カールはちゅうちよするが、彼の自由意志はこの習癖にあくまでも忠実な火夫に抗うことができない。《Karl zögerte noch. Da faßte unversehens der Mann die Türklinke und schob mit der Tür, die er rasch schloß, Karl zu sich herein. (A. 10)》なお不思議なことは、この時通路にはのぞき見するような者は誰一人として見当たらなかったものであり、ドアを閉めた火夫自身でさえそのことを認めていることだ。

火夫の勧めに応じてカールは彼のベットで横になるが、そのとたん今度は知り合ったばかりの男に預けてきたトランクのことを思い出し、一刻も早くこの部屋を出ようとする。この時にもカールの意志を阻むのは火夫の腕力と「船が空になってからの方が見つかりやすい (A. 11)」という、一刻を争う今およそ理解しえない理屈なのだ。《„Da muß ich aber doch gleich hinaufschauen.“, sagte Karl und sah sich um, wie er hinauskommen könnte. „Bleiben Sie nur“, sagte der Mann und stieß ihn mit einer Hand gegen die Brust, geradezu rauh, ins Bett zurück. (A. 11)》この仕打ちに対するカールの反発は、男がこの船の火夫であることを打ちあけると嘘のように静まってしまう。

いやそればかりか、この得体の知れぬ火夫の受難史にすっかりつりこまれて、自分の権利を船長に主張するようにと忠告まで与える始末なのだ。火夫がこの忠告に立腹したものだから、カールはまたしても「トランクを取りに行った方がましだろう」と考えはするのだが、どういうわけかすぐにそれを忘れてしまうのだ。それほど火夫のベットは居心地がよいのだ。《Karl, der schon nahe daran gewesen war, sich im Bett zu einem von allen Sorgen um Koffer ...befreiten Schläfe auszustrecken, (A. 14/15)》カールが火夫のベットで身体を伸ばして眠りこもうとしたとたんにそれを妨げるのは、偶然通りかかった「船の楽隊」《Schiffskapelle (A. 15)》である。それは乗客の上陸が完了したことを知らせるものであり、二人は部屋を出ようとするが、その時火夫はまるでカールの自由意志を封じるかのように彼の手をつかむ。火夫は先程の約束通りカールの雨傘とトランクと一緒に探してくれるのではなく、彼を会計本部のある事務室へ連れていくのだ。火夫の部屋からここまでカールは自分の持物を探そうと少しも試みない。カールには自分が何故ここまで来てしまったのか皆目わからない。というのも、事務室に入るや否や彼はその部屋の三つの窓から見える海の波に夢中になってしまうのだから。やがてカールはある不可解な理由から火夫の弁護士の役割を引き受けることになるのだが、それに関しては後で述べることになるだろう。

火夫が受けた不当な扱いをめぐる法廷でカールは伯父にめぐりあう。この出会いも主人公と火夫の出会いと同様に、あるいはそれ以上に偶然によっていると言えよう。勿論のこと伯父がこの場に居合わせる理由は全くないわけではない。それは後になって初めて明らかになることなのだが、カールを誘惑した例の女中がこの伯父に手紙で「これまでの一部始終とカールの人相書と船名 (A. 28)」とを知らせてあったのである。伯父は可受い甥をわざわざ出迎えに来たというわけなのだ。しかし、何故伯父は船長をはじめ高級船員、港務局の役人などの集うこの事務室で甥を待ち受けることにしたのか。しかも乗客全員の上陸が完了したことを告げる船の楽隊もすでに引き揚げた後でも平然として。更に不可解な事実はまだ他にもある。伯父は絶対にカールを探していたのではな

いのだ。というのは、カールと火夫が不意に事務室に現れた時、伯父と船長は何やら低い声で立話をしていたのだが、その話題は甥の搜索の件ではなく、何と「アメリカの艦船事情」なのだ。甥と一緒にボートで立ち去ろうとする伯父にむかって、船長はこう挨拶している。《„…… Ich wünsche mir nur, bald Gelegenheit zu haben, mit Ihnen, Herr Senator, unser unterbrochenes Gespräch über die amerikanischen Flottenverhältnisse wieder einmal aufnehmen zu können und dann vielleicht neuerdings auf so angenehme Weise, wie heute, unterbrochen zu werden.“ (A. 34)》伯父が船長に甥の搜索を依頼しなかったことは同じ船長の次の言葉からも明らかである。《„Aber die Fahrt im Zwischendeck war wohl sehr arg, ja, wer kann denn wissen, wer da mitgeführt wird.“ (A. 30)》

伯父は甥を見出す確率の最も低い場所で、⁽³⁾搜索を依頼もせず、船長との雑談に花を咲かせていたのではあるが、それにもかかわらず無事に甥を見出す。これは偶然以外の何物でもないだろう。

以上の如く、忘れた雨傘に端を発し、火夫との遭遇、船の楽隊、船上の法廷、伯父との邂逅といった風に連続する『火夫』挿話における事件の展開は偶然に支配されている。父親によって故郷の町から追放されたカールはアメリカ到着とほとんど同時に勢力家である伯父の庇護下に入る。そしてカールの心をすっかり魅了した火夫は、第二章でカールが伯父の家に移り住んで以来、もはやただの一度も思い出されることがない。いみじくもカール自身が第一章の結末直前で《Es war wirklich, als gäbe es keinen Heizer mehr. (A. 36)》と⁽⁴⁾考えたように、まるでこの挿話全体が悪夢であったかのごとくに、火夫は忘れられてしまう。火夫はカールを伯父に引き合わせるためにのみ存在していたかのようだ。

カフカはなるほどこの『火夫』を独立した形で発表した。しかし、それが果たしてこのように全体から切り離された形で発表されうるものかどうか彼自身疑問を抱いている。「それが独立した形で公表されうるのかどうか私には分り

ません。なるほどそれだけ見ても、後が続く、しかも完全に失敗した五百頁があるとは必ずしも見てとれません。しかし、とにかくそれは十分には完結していないのです。それは断片です。いつまでも断片にとどまるでしょう。このような将来がこの章に大部分の完結性を与えているのです。(1913年4月4日。クルト・ヴォルフ宛て)⁽⁵⁾」あるいは「さしつかえさえなければ、少くとも内扉の『火夫』というタイトルの下に『断片』というサブタイトルが入れられることが私にはとても大事なのです。(1913年4月24日。クルト・ヴォルフ宛て)⁽⁶⁾」

では、『火夫』のこのような完結とも未完ともつかぬ性格は何に由来しているのか。ひとつには「この章に大部分の完結性を与えている(五百頁もの)将来」のためであり、またひとつには実現されなかった計画『息子たち』(„Die Söhne“)の中における統一のためでもある、と考えられる。

まず、五百頁の将来の方を見てみよう。第二章以下でも事件の展開はことごとく外部状況に支配されており、カールはまるで波間に漂う塵芥さながらに受容、追放あるいは余儀ない逃走のパターンを繰り返しながら、次第に未知の大陸アメリカの奥深くへ入ってゆく。彼は不自然な仕方でめぐりあえた伯父に迎えられるが、それも束の間またしても不自然な仕方で追放されてしまう。伯父との出会いが女中の手紙によって表面的にはありえそうなことに擬装されているのと同様に、伯父による追放も「伯父の信奉する主義にカールが全面的に背いた(A. 80)」という理由づけがなされてはいるが、このことがしたためられている手紙が実に理不尽である。何とその手紙の上書きには《An Karl Roßmann, um Mitternacht persönlich abzugeben, wo immer er angetroffen wird. (A. 79)》と書かれているのだ。こんな不自然さも作品の中にあってはさほどそうとも映らないところにカフカの恐ろしさがある。この上書きは、追放の原因は甥の背信にあるという伯父の理由づけよりも、むしろ理由はともかく是が非でも彼を追放してしまおうという意図の方がより強く感じられはしないのだろうか。⁽⁷⁾実際、伯父はそうしようと思えばできたのに、田舎屋敷を訪問しようとするカールを事前にとがめなかったのであり、また手交の仲介を依頼された伯父の親友グリーン氏は、問題の刻限前に戻ろうとするカールを故意に引きとめ、

彼の追放がすでに決定済であるかのごとく、トランクと雨傘を持参しているのだ。ここにはカールの意志が反映される余地は全くないと言えよう。

見かけは救済者を装うロビンソンとドラマルシュとの出会いと彼らの窃盗行為による別れ、オキシデンタルホテルでの女コック長による受容とボーイ長、門衛長による追放、ドラマルシュとブルネルダの住居への受容とオクラホマの野外劇場への道。このように、第二章以下に連続する各章は、「火夫」の章における偶然による出来事の支配を、いわばその周波数を単に増幅したにすぎないことが分る。つまり端的に言ってしまえば、「火夫」挿話は『アメリカ』全体の雛形なのである。第一章末の「伯父の視線」と『アメリカ』最終章末の「走り行く列車」とに見られる、主人公のその後の行方を読者の判断に委ねるような象徴性は、「火夫」の章と全体とが同じ構造を持っていることを示すものであろう。とすると、この物語は永遠に続くのではあるまいか。

次にここで、実現されなかったカフカの計画『息子たち』から『火夫』を見てみよう。先に引用した出版人ヴォルフ宛ての手紙の後半部には「ひょっとしたら後に、この二つの作品（『火夫』と『変身』のこと）とアルカディアの『判決』は『息子たち』と名付けることのできる一冊のちゃんとした本になるかもしれません（1913年4月4日⁽⁸⁾）」とある。その一週間後のやはりヴォルフに宛てた手紙「『火夫』『変身』……そして『判決』は外的にも内的にも互いに関連があります。それらの作品の間には明らかな結び付きが、それ以上に隠れた結び付きがあるのです。たとえば『息子たち』というタイトルを与えられた本へまとめることによって得られる、その構成を私は断念したくないのです。……私にはその三つの物語の統一の方がそれらひとつの統一より重要でないこともないのです。（1913年4月11日⁽⁹⁾）」

ところが、その後カフカの計画は変わり、今度は『判決』『変身』『流刑地にて』 („In der Strafkolonie“) を『罰』 („Strafen“) というタイトルで一冊にまとめることを考える（1915年10月15日。ヴォルフ宛て⁽¹⁰⁾）。外的にも内的にも関連があるはずの『息子たち』の中から『火夫』が抜け、その代わりに『流刑

地にて』が入って、総タイトルが『罰』に変わるという、この計画変更は『火夫』の性格をかなり明らかにしてくれる。最初の計画から『火夫』を除いたことは、単にこの作品が『アメリカ』の第一章を成しているという事実によるのではなく（何故なら、カフカは後に続く五百頁を承知の上で単独で公表しているのだから）、ひとつの全体を成す『息子たち』の中で『火夫』は他の二作品と比べて微妙なテーマの相異があるからである。『息子たち』という曖昧な総タイトルの下では許容されるが、『罰』というより厳格に規定されたタイトルの下では脱落せざるをえない微妙な相異があるのだ。たしかに『火夫』だけ見ても『罰』というテーマは読みとれない。そうかといって、ここにはこのテーマが全く存在しないわけでもない。つまり『火夫』は『アメリカ』全体に組み込まれて初めて、「永遠の追放」という罰が浮かび上がってくるのだ。

ここで『息子たち』という統一体の中で、『火夫』と他の二作品をもう少し詳しく見てみよう。カフカの言う「外的及び内的な関連」あるいは「ひとつの作品の統一より大事な三作品の統一」が幾つか挙げられる。まず(1)父親と息子の対立である。彼らの関心は（カフカ自身が『父への手紙』で訴えているように）正反対の方向へ走っている。(2)息子は表面上は父親の役割を演じているが、実際には完全に父親たることができず、常に父親の承認を得たいと望んでいる点である。ゲオルクは友人宛ての手紙をわざわざ父親に見せに行く。グレーゴルは年老いた父親に代わって家族全員を養いながらも、預金の管理は父親に任せている。そしてカールは女中に産ませた子供によって文字通り父親になるが、火夫を弁護する際に両親の賞賛を思い描くのだ。(3)父と息子の対立は常に息子側の敗北に終わり、息子の罪（どうやらこれは息子が父親の役割を演じる点にあるらしい）と罰（死と永遠の追放）の間には合理的な理由が見当たらない。(4)息子はいずれも両親に対して愛情を抱いている。橋上でのゲオルクの最後の叫び、グレーゴルの愛と涙まじりの両親の回想、カールも両親の写真を何より大事なものとしている。対立しながらも愛で結ばれている父子の悲劇。(5)更にカフカ言うところの「内的関連」であると思われる、息子の自我の分裂である。『判決』におけるゲオルクと友人、『変身』におけるグレーゴルの変身し

た肉体と精神、そして『火夫』におけるカールと火夫である。(6)物語技術上のことでも共通点が見られる。物語は全く主人公の視点からのみ語られる点、従って主人公の前歴は彼自身の想念の中で語られる点である。もっとも『火夫』では伯父による女中の手紙の解説という手段によって助けられてはいるが、その後にはやはりカール自身の回想によって知らされる。語られる物語の現在感を損わないためにはこの方法が最適なのである。

カールと火夫の関係は他の二作の分身相互の関係ほど明瞭なものではない。つまり、父親の事業の後を継ぎ、正に結婚に踏みきろうとするゲオルクの妨げとなる幼馴染の友人、あるいは家族を扶養するグレーゴルに突然襲いかかり、彼を廃人同様にしてしまう肉体の変身が「作家としての自己」を、ゲオルク自身とグレーゴルの正常な精神が「社会的な自己」を指すといった明瞭な対立関係が後退し、逆にカールと火夫が互いに援助を求め合っていることが前面に押し出されているからである。しかし、この両者も結局は別れねばならぬのであり、その意味では互いに相容れないと言えるのではないか。両者の対立点を調べてみよう。それは、船上での法廷の場面で最もきわだっているように思われる。当面の敵シューバルが法廷に登場する時、カールの状態はこうである。《Karl allerdings fühlte sich so kräftig und bei Verstand, wie er es vielleicht zu Hause niemals gewesen war. (A. 24)》ここには現実に対処しようとする積極的な姿勢が見られる。それに対して火夫の方は自分の権利さえ満足に主張することさえできないのだ。《Der Heizer unterbrach sich zwar sofort, als er die bekannte Stimme hörte, aber mit seinen Augen, die ganz von Tränen der beleidigten Mannesehre, der schrecklichen Erinnerungen, der äußersten gegenwärtigen Not verdeckt waren, konnte er Karl schon nicht einmal mehr gut erkennen. (A. 21)》

火夫の部屋は言うまでもなく船底の暗い一室である。海に浮かぶ船とは生存の確固たる基盤を欠いていることを暗示させるかのようだ。⁽¹¹⁾しかも火夫は自分がこれまで働いていた船の名を二十程も挙げる事ができたのであるから、生

まれながらの船乗りであることが分る。すると、どうやら火夫の方が「作家としての自己」を代表していると言えよう。

そもそも火夫との出会いは、カールが只一人で船底へと下って行き、うす暗く狭い火夫の部屋でのことである。暗い場所へ下るという行為は実に暗示的である。しかも、丁度その時火夫はトランクを、カールにとっても関心事であるトランクをいじっているのだ。二人は同じドイツ人に設定されている。また、会ったばかりのカールをただちに自分のベットに横になるようにと勧めるところにも二人のただならぬ関係が認められよう。狭いとはいえ、その部屋にはベットの他に戸棚と椅子がひとつずつ置かれていたのだが。その上、カールは火夫とささいな感情の行き違いはありながらも、甲板に残して来たトランクのごとも忘れ、このベットの上で《so heimisch (A. 13)》に感じ、眠り込みそうにまでなるのだ。これは、『アメリカ』全編中で唯一のカールの憩いの場面であるだけになおさら注目に値しよう。

また、カールと火夫の関係を示すものに、火夫が被った不当な扱いをカールが信じる際の無根拠性があげられよう。彼は最初からもうまるで説得力のない火夫の不正に「昂奮するほどに」同情してしまうのだ。《„Das dürfen Sie sich nicht gefallen lassen.“ sagte Karl aufgeregt. (A. 13)》やがてカールは火夫に連れられて事務室に入り（火夫にはカールのような子供を連れていく理由はなく、トランクと傘を探さねばならぬカールの方でもついて行く理由はそれ以上はないのだが）、そこで火夫の弁護士の役を引き受けることになる。そうなった原因は単に火夫が彼を見下ろしたからにすぎない。《Der Heizer sah nach dieser Antwort zu Karl hinunter, als sei dieser sein Herz, dem er stumm seinen Jammer klage. (A. 17)》するともう次の瞬間にはカールは「後先のことも考えずに」その場を離れて、部屋を横切り、会計主任の机まで駆け寄るのだ。カールが火夫の不平を何の根拠もなしに正しいと信じていたことは次の箇所でも明白になる。《„…… Mir haben Sie es doch immer so klar dargestellt!“ ‘Wenn man in Amerika Koffer stehlen kann, kann man auch hie und da lügen, dachte er zur Entschuldigung. (A. 21)》カールは火夫の不平をはっ

きり聞いたわけではない。にもかかわらず、彼は火夫の弁護をせずにはいられない。彼には火夫の被った不正は疑いようのない事実だからである。彼の信仰は最後まで変わらない。《„Dir ist ja unrecht geschehen wie keinem auf dem Schiff, das weiß ich genau.“ (A. 33)》カールにとっては火夫の不当な扱いを認め、彼は弁護することはあらゆる理由を越えた必然なのだ。そうすることはカールの自己弁護に等しいのだ。火夫の形勢が悪くなり、彼が完全に《kampf-unfähig (A. 24)》になると、カールの思考はいよいよ冴え、あらゆる可能な事態に備える。この時（カールの想念通りに言えば《Unsichere Fragen und ungeeignetster Augenblick, sie zu stellen! (A. 24)》）両親のことが念頭に浮かぶ。《Wenn ihn doch seine Eltern sehen könnten, wie er in fremdem Land vor angesehenen Persönlichkeiten das Gute verfocht und, …… Würden sie ihre Meinung über ihn revidieren? Ihn zwischen sich niedersetzen und loben? Ihm einmal, einmal in die ihnen so ergebenen Augen sehn? (A. 24)》ここでカールが言っている「善」(das Gute) とはおそらく通常の意味ではあるまい。すでに見たように彼は火夫の不平を無批判的に受け入れたのであり、それは相手が他ならぬ火夫だったからである。従って「善のために」ではなく（何故ならカールの父親は「葉巻で人々を買収するような人間 (A. 14)」なのだ）「火夫のために」と言った方がよいのではないか。両親の喜びとは息子が分裂することなく生きていくことであろう。ゲオルクもグレーゴルも分裂した自我を父親に攻撃されることによって破滅するのだから。

他にも分身の暗示と取って取れぬこともない箇所がある。あるいは単なる形容にすぎないのだろうか。《Er (= der Heizer) stand da, …… und die Luft veskehrte durch den offenen Mund, als gäbe es innen keine Lungen mehr, die sie verarbeiteten. (A. 24)⁽¹²⁾》または火夫の手の描写《die rissige, fast leblose Hand (A. 34)》。『火夫』の最後近くでのカールの想念《Es war wirklich, als gäbe es keinen Heizer mehr. (A. 36)》これも、火夫が生身の人間のように描かれているだけに、逆に分身の暗示のようにも思われる。続いてカールは（こう思うこと自体が表面的には普通でないのだが）こうも思っている。《……

und es kamen ihm Zweifel, ob dieser Mann (= Onkel) ihm jemals den Heizer werde ersetzen können. (A. 36)》すると伯父の視線はこのような思いをたたえた甥の視線に耐えることができないかのようにカールの目から波の上へ外らされるのだ。《Auch wich der Onkel seinem Blicke aus und sah auf die Wellen hin, von denen ihr Boot umschwankt wurde. (A. 36)》伯父には火夫の代わりがつとまらないことは明白である。ゆきずりの知り合いにすぎぬ火夫の代わりを、妹の連れ合いに代わって甥を保護しようとする伯父につとまらぬ理由は言うまでもない。火夫は伯父以上にカールに近しい存在だからである。

カールは火夫にすっかり魅了されるが、伯父は最初から徹底して対立の姿勢をくずさない。カールが火夫のために行う弁論は開始早々に「あの竹のステッキを手にした紳士（実は伯父）の赤ら顔に惑わされ（A. 18）」、今度は火夫が自己弁護を始めるや否や、室内の他の誰よりも先に伯父は「竹のステッキを動かし始め、かすかな音ではあったが寄木張りの床を叩き（A. 20）」「もうとうに天井を仰ぎながら口笛を低く吹き鳴らし（A. 21）」「もう火夫のことを全く意に介さず、いや、それどころか嫌悪感を抱きながら……明らかに全く別の問題に従事しているらしく（A. 22）」、肉親同志の幸運な出会いを祝福しようとする火夫に対して伯父は「それは火夫の分際にすぎたことだと言わぬばかりに、後へ引き下がる（A. 31）」のだ。最後に伯父は火夫の息の根をとめるに十分な決定的な命題、即ち「規律」(Disziplin) を持ち出して、ただひとりの味方であるカールを彼から引き離す。《„ Mißverstehe die Sachlage nicht “, sagte der Senator zu Karl, „ es handelt sich vielleicht um eine Sache der Gerechtigkeit, aber gleichzeitig um eine Sache der Disziplin. Beides und ganz besonders das letztere unterliegt hier der Beurteilung des Herrn Kapitäns.“ (A. 32)》

最初、カールも火夫も伯父との出会いという新事実が自分たちを引き離す結果をもたらそうとは考えていない。逆に、大いに希望が持てそうな気配すら感

じ取っている。カールは慎重に伯父から距離をとりながら、この邂逅の影響を見きわめようとする。それはさしあたり敵味方どちらの側にも認められず、審理は伯父に預けられた格好で一時中断される。伯父が審理とは無関係な身内の話をしている間に、火夫はどうやら元気を取りもどしたらしい。カールはそれを二度確認し、よい兆候と受けとめている。更に、火夫は自分の弁護人の晴れがましい門出を祝福し、握手をする。

カールもまた火夫以上に事態の好転を予想しており、伯父の話が一段落するや否や、中断していた審理を再開しようと口火を切る。《„Was wird jetzt mit dem Heizer geschehen?“ fragte Karl vorbei an der letzten Erzählung des Onkels. (A. 31)》というのも彼は事態の好転を確信していたからだ。《Er glaubte in seiner neuen Stellung alles, was er dachte, auch aussprechen zu können. (A. 31)》《Er stand zwischen dem Onkel und dem Kapitän und glaubte, vielleicht durch diese Stellung beeinflusst, die Entscheidung in der Hand zu haben (A. 32)》しかし、彼の予期に反して事態は悪化する。そのことに逸早く気づくのは火夫の方である。彼は自分ではさほど望みをかけていないようなのだ。彼の態度は、初めから自分の権利主張の目的は勝つことではなく、単に戦いを挑むことにあったと言わねばかりだ。彼はこう想像しているらしい。《Er dachte sich aus, der Diener und Schubal, als die zwei hier im Range Tiefsten, sollten ihm diese letzte Güte erweisen. (A. 32)》火夫は伯父の持ち出した最後の切札「規律の問題」をも当然のように肯定する。彼はもはや自己主張しようとはせず、すすんでカールの犠牲になる。

このような火夫の態度を目の当たりにして、カールも次第に事態を正確に見抜き始める。彼は伯父との幸運な邂逅をそこに居合わせた全員から祝福され、こともあろうに敵の旗頭シューバルの祝辞さえ受けてしまう。これはカールが完全に伯父の圏内に入ったことを示すものであると同時に、船内では局外者として、もはや火夫の一件に干渉しえないことを示すものであろう。火夫は完全に孤立する。彼はもはや「どちらを向いても敵ばかりのこの部屋の中で、そこよりほかには目の落ちつき場所のなかったはずの (A. 32)」カールの方を眺め

ようとはしないのだ。カールはただちに自分の非に気付き、シューバルとの握手を後悔するが、すでに後の祭である。彼もここに至って事情を洞察している。余儀ない別離に際し、カールは最後の信仰告白をする。「この船じゃ、だれもそうじゃないのに、あんただけが不当な目にあってるんですよ。それが僕にゃ、はっきりわかってるんですよ (A. 34)」すでに自己犠牲の覚悟のできている火夫にはこの言葉は身に余るものであった。だから火夫は「だれひとり彼のことを悪く思っている者などいないみたいに、まるで有頂点になって、瞳をかがやかしながら周囲を見まわ (A. 33)」すのだ。カールは今こそ伯父の方を選択することによって支払った代償の何たるかを知る。『いろいろな理由があって、僕、もうとても力になってあげられないだろうって気がするんです』そう言うと、カールは泣き出しながら、火夫の手に唇を押しつけた。それから、ひびのある、そのほとんど血色のない手をとって、まるで諦めて捨てなくちゃならぬ宝物みたいに《Wie einen Schatz, auf den man verzichten muß (A. 34)》今度は自分の頬に押しつけた。(A. 34)」

カールは伯父と火夫との間で苦しい選択を強いられる。「だれにも不愉快な思いをさせんで、事をはこぶ手はないんだ。だが、伯父がやっとこさ自分を見つけ出したばかりなんだから、その伯父をいま見捨てるわけにもいくまい (A. 33)」カールにしてみれば、この選択は（伯父を選んで）自分の現在と将来を安全確実なものとするか、あるいは（火夫を選んで）勝目のない戦いを最後まで遂行するかのどちらかなのだ。彼には最初から選択権など与えられていないとさえ言えるだろう。

カールと火夫は無条件で互いの必要性を感取し、裁判半ばまで自分たちの勝利を信じている。カールは火夫の自己弁護が大して効果をあげなかった時でさえこう思っている。《Es war wirklich höchste zeit, noch ein kleines Weilchen nur, und sie konnten ganz gut beide aus dem Büro fliegen. (A. 21)》『判決』では、友人がゲオルクにロシアへ来るようにと勧め、彼がその地で支店を構えた時の有望な見通しを伝えたことがある。どちらの作品でも、分身は互い

に協力しようとし、そうすることによって生ずる事態の好転を期待している。分身の協力を阻むのは、主人公に訪れる「突然の飛躍」である。それによってゲオルクの店は発展し、更にはそれが富裕な娘との結婚の土台になる。ゲオルクが豊かなることによって、仕事にゆきづまった友人との共通の基盤は失われてしまう。『火夫』においても、父親に追放され、十分とは言えぬ身仕度で、三等船室で航海するカールは、幸運にも伯父に会うことによって、船内での最下層者である火夫との共通の基盤を失うのだ。

『息子たち』の分身たちは常にひとつになりたいと望みながらもそうなることができない。分身たちの一致は彼らの死を意味する。『変身』のグレーゴルにその典型を見ることができよう。変身という異常事は（無論、労働を妨げるという面を持ってはいるが）過酷な労働からグレーゴルを救出するという側面をも持っている。その意味では、変身は彼の願望であると言えよう。しかし、自我の分裂が他者という形をとらずに我身の変身という形をとって表れたグレーゴルにはその死はすでに冒頭から決定づけられている。『判決』でも分身の一致は死を意味している。父親の判決の直接原因はゲオルクが見せに行く手紙にあるのではないか。それはロシアにいる友人に宛てた結婚通知であり、「僕の結婚式は、一度すべての障害を払いのけるのにちょうど格好の機会ではないだろうか」とある通り、分身同志の一致の呼びかけなのである。ゲオルクが「支店を出すように」という友人の勧めに応じなかった間だけ無事でいられたことを考え合わせよう。

ところで、『火夫』ではカールが火夫を見捨てる形になっている。彼らは外的諸力のためにひとつになることができない。火夫の方でも身を引く覚悟はとうについている。伯父もまたカールを庇護することによって、彼が火夫とひとつになるのを妨げようとしている。『火夫』における主人公の没落の回避はこの点に基因していると思われる。しかし火夫を失ったカールを待っているものは果てしなく繰り返される放浪にすぎない。

伯父はカールが火夫に夢中になった事情に表面的な理由付けを与えて、この問題から彼を遠ざけようとする。《„Du hast dich verlassen gefühlt, da hast

du den Heizer gefunden und bist ihm jetzt dankbar, das ist ja ganz löblich. Treibe das aber, schon mir zuliebe, nicht zu weit und lerne deine Stellung begreifen.“ (A. 34)》 シューバルの手下供さえ カールから火夫を覆い隠す手助けをする。カールと伯父の乗るボートは偶然今までいた部屋の丁度外側を通ることになるのだが、手下供は「窓を三つとも占領して (A. 35)」いるのだ。

注

- (1) Malcolm Pasley, Klaus Wagenbach: Datierung sämtlicher Texte Franz Kafkas, in Kafka-Symposion, Klaus Wagenbach Verlag, Berlin 1965, S. 62/63
- (2) Urs Ruf: Franz Kafka Das Dilemma der Söhne, Erich Schmidt Verlag, Berlin 1974, S. 72
- (3) Urs Ruf: a. a. O. S. 72
- (4) 物語の悪夢のような性格に関しては、『判決』でも『変身』でも変わらない。たとえば〈Es war an einem Sonntagsvormittag im schönsten Frühjahr. (E. 43)〉という、それが何時、何処で起こったかは問題にしない märchenhaft な書き出して始まる『判決』は、ゲオルクの投身で幕をとじるが、主人公の死後に語られる最後の一行〈In diesem Augenblick ging über die Brücke ein geradezu unendlicher Verkehr. (E. 53)〉は、父子に生じた「日常性の裂け目」を再び跡形もなく閉じ合わせることによって、物語の悪夢性を際立たせている。『変身』でも、主人公の死後、家族の者たちは何事もなかったかのように生活を続行していく。
- (5) Franz Kafka: Briefe, S. 115
- (6) Franz Kafka: Briefe, S. 117
- (7) 船上での法廷で思いがけなく登場する伯父は、『アメリカ』の本来のタイトル『失踪者』 („Der Verschollene“) から見れば、物語の進行に逆行するものである。というのは、父によって追放されたカールはアメリカ到着とほぼ同時に彼によって庇護されることになるからである。カフカは何故カールをニューヨーク港で一人切りにして、失踪者としての本来の役割を彼に与えなかったのか。ここで伯父の機能が問題になるだろう。ただひとつ推測されることは、伯父は(後で述べる)分身相互間の格差を高めるために必要なのではないかということである。というのは、『判決』におけるゲオルクの店の突然の発展、『変身』におけるグレーゴルの一夜にしての突然の昇進、このような主人公の幸運な飛躍に相当するものを『火夫』の中で探すとすれば、それは正にカールと伯父との幸運な出会いであるからである。従って、火夫がカールを伯父のところ

へ導いたというよりも、カールと火夫が互いの身元を確認しあう際に、伯父の登場が必要になるのではないか。ところが伯父が物語の進行に逆行することはいかんともしがたい。だから伯父は再び「不自然な仕方」で甥を追放せざるをえないのだ。「伯父」の章が断片を除く八章の中で最も短いのもおそらく偶然ではあるまい。

- (8) Franz Kafka: Briefe, S. 115
- (9) Franz Kafka: Briefe, S. 116
- (10) Franz Kafka: Briefe, S. 134
- (11) たとえば『ある戦いの記録』における祈る若者の「陸地にいて感じる船酔い」、あるいは『判決』において「同国人とも土着の人とも交渉を断って独身生活を続ける」友人と共通の性格である。それに対して、カールは「地下三階、地上六階という堅固な建物」に居を定めることになる。
- (12) これは、『家長の心配』のオドラデクの描写を思い起こさせる。〈…… es ist aber nur ein Lachen, wie man es ohne Lungen hervorbringen kann. Es klingt etwas so, wie das Rascheln in gefallen Blättern. (E. 130)〉

尚、テキストは Franz Kafka, Gesammelte Werke, Herausgegeben von Max Brod, Taschenbuchausgabe in sieben Bänden を用い、() 内の数字はその頁数を示す。日本語での引用は『アメリカ』中井正文訳（角川文庫）を一部利用させていただいた。